あの中に居るであろう。

注　隈谷（くまがい）君　…　熊谷巌

熊谷巌は明治十六年、普代村堀内屋号「浜坂（はまさか）」熊谷家四代熊谷和吉の弟平助と、その妻普代村太田名部屋号「大家（おいえ）」大村惣十郎次女トモとの間に次男として生まれ、明治二十六年に一家で宮古に転居した。

盛岡中学、旧制熊本五高、東大卒で後、政友会代議士となった。

今を去る十数年前、金子功氏により発見された熊谷巌の位牌が出生地である普代村妙相寺にも現存している。戒名は

通泰院清巌良道居士

とあり、位牌裏に

為衆議院議員熊谷巌氏菩提施主普代追悼会とあった。

普代に生まれた英才の死を悼み、普代村の縁故者たちが追悼したものであろう。

なお、岩波本「寄生木」全三巻を貸してくれた友人K・K氏によると、この本は後年宮古市長となられた同市のS・C氏が「売れ残りは私が引き受けるから」と言って昭和三十一年に岩波書店に頼み込み再刊してもらったものだそうである。よい話と思い付言した。

（尚、熊谷巌氏の記述については、ご子息と連絡がつかず、孫K・K氏のご了解をいただいた）

（参考　寄生木　岩波書店　昭和三十一年）

金子功氏（七一、中央区）提供

ふれあい交流センター図書室蔵書人名辞典から

徳富蘆花（とくとみろか）

（1868～1927年）

・要点　明治・大正時代の小説家。

・小伝　蘇峰の弟。熊本に生まれる。京都同志社大学で校長新島襄の感化を受ける。上京して兄の民友社にはいり、小説を書く。国民新聞連さいの「不如帰」で有名になる。東京の郊外で、半農生活をしながら作品を生む。随筆「自然と人生」「みみずのたはごと」

小笠原　善平

（1881～1908年）

徳富蘆花の小説『寄生木』のモデル。東閉伊郡山口村（宮古市）に村長小笠原喜代助の次男として生まれる。一六歳で郷里を出て、仙台の乃木希典第二師団長の学僕となる。やがて職業軍人を目指して陸軍中央幼年学校・士官学校を卒業し、日露戦争の奉天会戦で負傷したが、中尉に昇任し原隊に復帰した。のち、結核を患い、失恋に悩み、休職して自宅で加療中、ピストル自殺を遂げた。菩提寺である宮古市山口の慈眼寺には乃木大将の筆による墓碑がある。なお、『寄生木』は大正六年までに六〇数版を重ねる大ベストセラーとなった。

乃木　希典

（1849～1927年）

・要点　日露戦争で活やくした軍人。

・小伝　長州（山口県）の出身で、日清・日露の戦争に出陣した。特に、日露戦争では第3軍司令官として苦戦しついに旅順（中国）を占領した。陸軍大将で、学習院院長となった。尊敬していた明治天皇の葬儀の日、妻とともに天皇のあとを追って自殺した。

熊谷　精治

（1871～1936年）

教育者・村長。閉伊郡普代村に生まれる。明治二五年岩手師範学校卒業。千徳尋常小学校（宮古市）・宮古町鍬ヶ崎町組合高等小学校・普代村尋常小学校の訓導・校長、宮古町鍬ヶ崎尋常小学校校長を歴任したほか、徳富蘆花の小説『寄生木』の主人公篠原良平こと小笠原善平の恩師隈谷先生のモデルといわれる。同三五年に教職を辞したのちは故郷で家業の農林業に従事し、同四二年より二年間は普代村長を務めた。その後、木炭移出業、海産物商、運送業などを経営し、地域の産業の振興と発展を図ったほか、明治三五年より三〇年間村の学務委員を務め、教育環境の整備に寄与。また、明治二九年の三陸大津波の際は詳細な記録を残している。

熊谷　巌

（1883～1933年）

政治家。北閉伊郡普代村に生まれ、明治二六年父と共に下閉伊郡宮古町に転居した。

旧制盛岡中学校・旧制第五高等学校を経て東京帝国大学法学部卒。在学中に高等文官試験、その後、弁護士・外交官試験に合格し、原敬の紹介を得て内務省に奉職。警視庁保安部長を最後に政界に転じ、大正一三年より衆議院議員を四期連続務めた。立憲政友会総務、鉄道会議議員などを歴任し、国鉄八戸線・山田線の建設促進に尽力。

昭和一一年には生前の功績をたたえ宮古市常安寺境内に胸像が建立されたが、戦時中金属供出のため撤去され、現在は台座を記念碑に改造し建立されている。また、徳富蘆花の小説『寄生木』の主人公篠原良平こと小笠原善平の、高等小学校の同窓生「隈谷君」のモデルといわれる。